

三四郎の「亡びるね」

Junko Higasa 2014.7.10

漱石作『三四郎』で、車中の男一広田先生は、日露戦争以後の日本は『亡びるね』と云った。

『日本より頭の中の方が広いでしょう』『囚われちゃ駄目だ。いくら日本の為を思ったって最良の引倒しになるばかりだ』

頭の中では理想を広げやすい。理想が膨らめば、それが現実に見える。それを現実と信じれば、それが当然となる。当然となったら、それが唯一になる。そうすると、もう「意外」は頭に浮かばない。

日本は日露戦争勝利の二文字に囚われていた。その自信に囚われて、さらに世界進出しようとするが世界の壁は厚い。いくら日本を発展させようと急激に動いても、そこには「勝利」という結果だけの最良目がある。その苦心の経過は頭の外である。

運も実力のうちとはいえ、いつでも幸運が後押ししてくれるとは限らない。最後にものをいうのが基礎力である。日本は短期間で西洋に追いつくために、その表面だけを真似た。ところが西洋文明は、それが機能する社会的基盤を作ってきた上に成り立っている。油彩画で下の油が乾かないうちに上を塗ると、膨張して亀裂を生じると同様に、西洋同等の社会基盤がない日本が、西洋文明を真似ても長い間には歪みができる。だから日本は、日本独自の基盤力の上で進展していかなければならない。表面模倣は「亡びるね」それはどんな国、どんな個人にも言える。